

平氏を討し、十六年六月二十日利常は幕府に請うて江沼郡一圓及び越中新川郡九ヶ村七萬石を分かち、大聖寺に治せしめた。但し江沼郡のうちでも那谷村は利常の領であつた。利治が初度の入部の何時であつたかは不明の問題の一である。徳川實記によれば利治は十六年十一月廿六日登營辭見して居り、天寛日記では十一月給暇を謝し、十七年初には既に大聖寺に在り、而して同年十月又參勤したことになつてゐる。然れば入部は十六年十二月に相違ないと思はれるが、さうした文獻は得難い。兎に角十七年十月十二日江戸發駕入部とする三筆記は誤謬である。正保三年十二月晦日利治侍從に任じ、萬治三年四月廿一日江戸に卒した。享年四十三。法號實性院機雲宗用大居士。大聖寺城南に葬り、宗英寺を移して實性院と改め、以て守家たらしめた。後大正十三年二月十一日從三位を追贈せられた。

マヘダトシヒサ 前田利久 通稱藏人。前田利春の嫡男。永祿三年父の後を受けて、尾張荒子城を領し、祿二千貫を食んだが、十二年織田信長の命により、家を弟利家に譲つた。利久荒子を去つて後十數年、利家の金澤に治するに及んで、又來仕して祿七千石を受けた。利久溫和優柔であつたが、利家は阿兄として常に之を重んじてゐた。天正十五年八月十四日歿。法號眞寂院孤峰一雲。その室は龍川儀太夫益氏の妹。利久の養子を利太といふた。

マヘダトシヒテ 前田利秀 初の名は利次。利家の弟秀繼の男である。初め父と共に津幡城に居り、天正十三年また共に越中今石動に移つたが、同年秀繼の木船に轉じた後は獨留つてこの城を守り、祿四萬石を受けた。次いで末森・蓮沼・松枝・八王子の諸戦に従ひ、文祿二年肥前名護屋に赴く途上病に罹り、家臣篠島織部をして兵を督せしめ、歸國の後十二月十九日今石動に歿した。享年廿六。法號良將院光等正惠居士。同地本行寺に葬る。子なく、系即ち断絶した。

マヘダトシヒラ 前田利平 大聖寺藩主第十一代。前田利之の五男、母は蓮靜院。文政六年十二月廿二日大聖寺に生まる。幼名銚七郎。天保九年十月十一日兄利極の養子となり、十二月五日家督を繼ぎ、同月廿八日從五位下大藏少輔に叙任、十二年十二月十六日從四位下に陞り、備後守と改めた。嘉永二年七月七日大聖寺に卒し、八月十九日發喪、享年廿七。法號見龍院存誠洗心大居士、實性院に葬る。利平は學を好み、弘辯と號した。

マヘダトシマサ 前田利政 前田利家の次男。母は芳春院。天正六年尾張荒子に生まる。幼名又若、後孫四郎。諱は利正にも作る。文祿二年九月從四位下に叙し、侍從に任ぜられ、能登口郡の一部に封ぜられて能登侍從と稱したが、この時の知行高は明らかでない。利家老臣長連龍・村井長次・高山長房・不破廣綱等を之に隸せしめた。慶長二年七月利政七尾城に移り住み、四年三月廿一日利家の養老封中口郡一萬五千石を更に分與せられた。五年豊徳二氏の相争うた時、利政は兄利長に副として兵を出し、大聖寺城を陥れて一たび班軍したが、後家康の檄至り、利長のまた南上せんとするに當つて、利政は之に従はなかつた。是を以て戦後封を除かれ、祝髮して京師に卜居し、宗西又は宗祝と稱した。十九年豊臣氏の兵を擧げんとした際、秀頼は加賀・越前二

國を懸けて利政を誘うたが、取へて應じなかつたから、家康は之を嘉し、十萬石を與へて仕へしめんとしたが、利政はその大坂に興しなかつた理由は、關東に對する忠節の爲ではなく、大野治長等の指揮に従ふを欲しなかつたに因ると稱し、亦その徳意を辭した。寛永十年七月十四日五十六歳を以て京師に卒、福昌院怡伯宗悦居士と諡し、大徳寺塔頭芳春院に葬る。利政の妻を稱といひ、瀧生氏郷の女であつたが、寛永十三年四月京師に歿し、而してその女は市人角倉與右衛門に嫁し、男は即ち三左衛門直之であつた。

マヘダトシマサ 前田利昌 ↓マヘダトシハル 前田利春。二代前田利明の四男、第三代利直の弟。母は慈眼院。貞享元年十一月十五日生まる。通稱掃部・采女。元祿五年七月九日新田一萬石を利直から分與せられ、諸侯を以て遇せられたが、別に一藩を立てたものではなかつた。寶永六年正月十日將軍徳川綱吉薨じ、廿二日逃骸上野寛永寺に入り、廿八日廟所に移り、廿九日から法要が初つた。時に勅使下向し、利昌は大和柳本藩主織田監物秀親その他と共に接待役を命ぜられ、二月十六日勅使が綱吉の廟に參向する前夜より子坊惠恩院に出勤してゐた。(この寺號は實は顯性院であるが、當時の住職僧正最妙が輪王寺門跡から惠恩院の院室號を受けてゐたので、寺坊をも亦惠恩院と呼んだのであるとする説もある。然るに利昌は豫て秀親の體度の傲岸無禮なるに含む所があつて、早曉之に會するや直に短刀を振うて彼を刺し、利昌の臣岡田彌市郎が變を聞いて

馳せ付けたのを、他人の己を妨げるものと誤つてまた傷つけた。既にして木村九右衛門等利昌を疾と稱し、輿に乗せしめて茅町の邸に歸つたが、秀親の從臣は未だこのことあるを知らなかつた。同日午刻過ぎ幕府の大目付松平石見守以下利昌の居に臨んで訊問する所あり、次いで夕刻石川主殿頭の家に移して幽閉し、十八日未刻を以て死を賜はつた。享年廿六。十九日朝下谷廣徳寺に葬り、法號を眞源院雄鋒紹機居士といふた。この刃傷の報の大聖寺に達したのは廿四日子刻で、切腹の報は廿八日であつた。利昌仁慈にして士を愛し、面貌優雅なるも膂力あり、側室はあつたが、子女はなかつた。その封は一時收公せられたが、四月十二日改めて兄利直に返還せられた。(後昭和二年東京府北豊島郡下練馬の廣徳寺附屬墓地に改葬)。

マヘダトシミチ 前田利道 大聖寺藩主五代。前田利章の嫡男、母は桂林院。享保十八年四月廿四日江戸に生まる。幼名遣酒丞。元文二年十月廿七日封を襲ぎ、延享四年十二月十九日從五位下登岐守に叙任、寛延二年五月廿七月初めて入部、三年四月廿五日備後守に改め、寶曆四年十二月十八日從四位下に陞り、安永七年五月廿五日致仕、七月四日遠江守と稱し、天明元年正月十四日江戸に卒。享年四十九。法號顯照院徹嚴義心大居士、實性院に葬つた。利道子女に恵まれ、次男利精・三男利物は相繼いで大聖寺藩主となり、六男利以は七日市侯を、八男利幹は富山侯を襲ぎ、二女正姫は加賀前田治脩の室となつた。

マヘダトシミチ 前田利行 大聖寺藩主第十三代。加賀藩主前田齊泰の五男。母は馨袖

馳せ付けたのを、他人の己を妨げるものと誤つてまた傷つけた。既にして木村九右衛門等利昌を疾と稱し、輿に乗せしめて茅町の邸に歸つたが、秀親の從臣は未だこのことあるを知らなかつた。同日午刻過ぎ幕府の大目付松平石見守以下利昌の居に臨んで訊問する所あり、次いで夕刻石川主殿頭の家に移して幽閉し、十八日未刻を以て死を賜はつた。享年廿六。十九日朝下谷廣徳寺に葬り、法號を眞源院雄鋒紹機居士といふた。この刃傷の報の大聖寺に達したのは廿四日子刻で、切腹の報は廿八日であつた。利昌仁慈にして士を愛し、面貌優雅なるも膂力あり、側室はあつたが、子女はなかつた。その封は一時收公せられたが、四月十二日改めて兄利直に返還せられた。(後昭和二年東京府北豊島郡下練馬の廣徳寺附屬墓地に改葬)。

マヘダトシミチ 前田利道 大聖寺藩主五代。前田利章の嫡男、母は桂林院。享保十八年四月廿四日江戸に生まる。幼名遣酒丞。元文二年十月廿七日封を襲ぎ、延享四年十二月十九日從五位下登岐守に叙任、寛延二年五月廿七月初めて入部、三年四月廿五日備後守に改め、寶曆四年十二月十八日從四位下に陞り、安永七年五月廿五日致仕、七月四日遠江守と稱し、天明元年正月十四日江戸に卒。享年四十九。法號顯照院徹嚴義心大居士、實性院に葬つた。利道子女に恵まれ、次男利精・三男利物は相繼いで大聖寺藩主となり、六男利以は七日市侯を、八男利幹は富山侯を襲ぎ、二女正姫は加賀前田治脩の室となつた。

マヘダトシミチ 前田利行 大聖寺藩主第十三代。加賀藩主前田齊泰の五男。母は馨袖

馳せ付けたのを、他人の己を妨げるものと誤つてまた傷つけた。既にして木村九右衛門等利昌を疾と稱し、輿に乗せしめて茅町の邸に歸つたが、秀親の從臣は未だこのことあるを知らなかつた。同日午刻過ぎ幕府の大目付松平石見守以下利昌の居に臨んで訊問する所あり、次いで夕刻石川主殿頭の家に移して幽閉し、十八日未刻を以て死を賜はつた。享年廿六。十九日朝下谷廣徳寺に葬り、法號を眞源院雄鋒紹機居士といふた。この刃傷の報の大聖寺に達したのは廿四日子刻で、切腹の報は廿八日であつた。利昌仁慈にして士を愛し、面貌優雅なるも膂力あり、側室はあつたが、子女はなかつた。その封は一時收公せられたが、四月十二日改めて兄利直に返還せられた。(後昭和二年東京府北豊島郡下練馬の廣徳寺附屬墓地に改葬)。